令和７年度　　令和７年９月吉日

中海小だより

小松市立中海小学校　校長　若山　直代

二学期が始まりました。とても暑い夏でした。35℃越えが普通のようになってしまいました。朝晩は少しずつ涼しくなってきたようですが、日中は９月とは思えないほどの暑さです。その上、雨が降れば「災害級を警戒」という予報です。心配は尽きませんが、子どもの安全を守るため、見通しをもって準備をしていくしかないと思っています。

保護者・地域の皆さまにおかれましては、常日頃より学校教育活動にご理解・ご協力をいただき誠にありがとうございます。２学期も、どうぞよろしくお願いいたします。

言葉の力をつけるということ

―全国学力調査の質問紙から―

「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」

これは、全国学力・学習状況調査で子どもたちに投げかけられた質問だ。中海小は肯定的な回答（当てはまる・どちらかといえば当てはまる）が８割を超えた。これは県や全国を上回る数値である。また、「当てはまる」という回答が全体の約半分を占めていたこともうれしい驚きだった。

私たち教職員が、少しでも子どもを勇気づける存在になっているなら、こんなにうれしいことはない。それと同時に、２割弱の子どもが「（どちらかといえば）当てはまらない＝学校に話せる大人はいない」と答えていることから目を背けず、だれもが安心して相談したり尋ねたりできる学校であるよう努力しなければと心を引き締めている。

学校や仕事に行けば、自分の思いとは違ったり傷ついたりすることもある。それに対してどう振舞うか、文芸評論家の三宅香帆さんはこう書く。**「社会にでて重要な言語の力は、感情を言葉にする力」「自分の気持ちを伝える選択肢を持つこと」**。言葉にして伝える＝言語化ができれば、自分を理解してもらったり、不用意に相手を傷つけずに済んだりできるという。つまり**「言語化とは、自分を守る技術である」**と。

私たち大人ができるのは、子どもたちに「言語の力」をつけていくこと。言葉は表現することによって育つから、たくさん会話をして、書いてもらいたい。自分の考えていることや感じていることに蓋をせず大切にできるように。自分の言葉で、これからずっと自分を守ることができるように。

そして、子どもに感情を言語化できる「場」を作ること。この「場」は単に相談室を作るというのではなくて、一人一人の教員が、子どもの誰かの止まり木みたいな存在になること。子どもが話したいなと思ったら、ふっと来て話しかけられるような余白のある自分でありたいと思う。

え、この原稿にどれだけ時間を費やしているんだって？　私も言語化のトレーニング中なんです。